

貞享騒動とその時代 ——多田加助——

< 後編 >

安曇野市教育委員会

教育部文化課

逸見 大悟

(※レジュメの章項立て及び関連史料の番号は前編からの通し番号を用いています。)

五、首謀者の処罰へ

1、三斗挽きへの揺り戻し

(1) 達し書き返上

騒動が静まったのち、塩尻組、庄内組などから達し書き（第 2 次回答書）が返上される。【史料 9】
→裏で藩側が画策した模様。塩尻組組手代・赤羽太郎右衛門の 10 月 20 日の日記によれば【史料 10】
代官「庄内組と島立組では、『2 斗 5 升挽きの証文は、あとに居残った者に下されたもの。3 斗挽きの証文をいただき、騒動には 1 人も加わりませんでしたという証文まで出しておきながら、あとから出た 2 斗 5 升挽きの証文までいただくのは如何なものか…』と言って返した。」

→言っていたのは庄内組や島立組だけれど…

「2 斗 5 升の証文を（いつまでも）持っていれば『いたずら者』だぞ！」

(2) 3 斗挽きでの収納へ

11 月 1 日 各組から 3 斗挽きの願い出が提出されたとして、その実施が各村へ通達される。

→閉門中だった前任の納手代も新任者とともに宛挽きに出る。

2、加助たちの処刑とその後

(1) 加助たちの願いは聞き届けられたのか…

加助たち 5 ヶ条から成る訴状を提出→その後どうなったか？【史料 11】

【表 1】により、訴状の内容や藩の回答をおさらいしながら経過を見てみましょう。

(2) 首謀者らの処刑

11 月 22 日、首謀者及びその家族の処刑が行われる。【表 2】処刑対象者一覧参照

六、多田加助の人物像

ここまで騒動の経緯をたどってきましたが、首謀者である多田加助はどんな人物だったのでしょうか。分かることは少ないのですが、史料から垣間見ることができる人物像を述べてみたいと思います。

1、多田家は中萱村の上層農民

- ・中世の土豪の系譜を引く←県指定史跡「多田加助宅跡」
- ・江戸時代初期には村の肝煎（のちの庄屋）を務めた。
- ・多田家の持ち高（慶安 4 年(1651)の検地によれば）
田畑 2 町 3 反 7 畝 4 歩
石高 30 石 8 斗 5 升 6 合 ——村内の大百姓
- ・熊野神社は、多田家が勧請したと伝える。

2、加助の事績

(1) 彦三郎と名乗っていた庄屋時代

寛文4年(1664) 上中萱村の庄屋となる。

寛文9年(1669) 村の庄屋を務めた父・加助が亡くなる。

延宝2年(1674) (以降、『信州長尾組与手代御用留日記 上巻』参照)

9月27日 代官、長尾組の晩田^{おくて}検見を中萱村から開始。彦三郎宅に滞在して政務を執る。

10月26日 長尾組一帯の百姓ら、不作により藩に訴訟。

10月27日 上中萱村庄屋・彦三郎、長尾村庄屋・兵四郎、及木村庄屋・藤十、野沢村庄屋・七ノ丞、蔵込めに処せられる。

11月6日 百姓らの訴訟が聞き届けられる。

11月19日 長尾組、年貢皆済及び20分の1大豆の半分の支払いの督促を受ける。

11月25日 長尾組、再度20分の1大豆の半分の支払いの督促を受ける。

11月29日 長尾組組手代・甕左五兵衛、大豆金納分の99両を、上中萱村庄屋・彦三郎、楡村庄屋・善太郎、住吉村庄屋・九郎兵衛に渡す(代官へ納めさせたものか)。

延宝4年(1676)

11月27日 長尾組組手代・甕左五兵衛、上中萱村庄屋・彦三郎、長尾組払庄屋・二木弥兵衛に指示し、大豆金納分の149両を代官・清水仁左衛門方へ納めさせる。

この年 権現の宮の破損修復で村中に勧進を呼びかけたが集まらず、結局加助が自分の借金で建立をはかった、と言われている(田中薫『貞享義民一揆の実像』(信毎書籍出版センター・2005年)(以下、『実像』と略す)87頁)。

<参考>市有形文化財「中萱の熊野神社本殿」の標柱の説明文

「本殿は間口九尺(二九四cm)、奥行四尺(一二二cm)、三間社隅木入春日造、銅板葺(元柿^{こけらぶき}葺)、隅木入春日造は熊野信仰にまつわる神社本殿に多く見られ、山岳信仰や修験道との関係が深い神社形式である。正面向拝の^{かえるまた}裏股に社紋の『抱^だ茗^{みょう}荷^が』が、木鼻^{きばな}に象の彫刻がある。造りの形式や彫刻から十七世紀中期の建築とされる。」(安曇野市教育委員会)

→中萱村が貧しかったこのころ、神社の修築をする余裕があったのか、加助とのかかわりはあったのか?今後の検討課題だろう。

延宝6年(1678)

6月4日 御茶壺道中の人足として長尾組から人足100人及び馬7頭を出す。上中萱村庄屋・彦三郎ら、引率。

7月22日 長尾組組手代・甕左五兵衛、上中萱村庄屋・彦三郎に小役金18両1分銭500文を渡し、代官・清水仁左衛門方へ納めさせる。

延宝8年(1680)

8月9日 郡奉行・堀弥五兵衛と代官、中萱に宿泊(彦三郎宅を利用したか?)。

8月10日 長尾組の早稲検見、中萱村より開始。

9月28日 長尾組・上野組の百姓ら、のぎ踏みみがき撤廃を願い出(前回の配布資料参照)。

——この事件と彦三郎(加助)の関わりは不明。ただし中萱村の八郎兵衛が蔵込め。

延宝9年(1681) 庄屋役を罷免される。

8月22日 中萱村の8月に返済する予定だった拝借束の返済遅延により彦三郎の妻が人質に取ら

れる。

9月28日 上野組・長尾組の百姓ら、のぎ取りの撤廃を代官に訴える。

9月30日 長尾組組手代・甕左五兵衛、訴訟の際に代官へ強い発言があった科により中萱村の八郎兵衛に蔵込めを申し付ける（10月6日赦免）。

10月14日 彦三郎、楡村庄屋・小穴善兵衛、一日市場村庄屋・角右衛門とともに庄屋役を召し上げられる。（→以後、彦三郎は加助を名乗る。）

・上中萱村庄屋・彦三郎、楡村庄屋・善兵衛…「身上罷り成らず」

・一日市場村庄屋・角右衛門…無筆

・庄屋・彦三郎のすがた——庄屋として働き、村の為に尽力しただけでなく、長尾組や藩へも協力した。ただし、中萱村も必ずしも豊かではなく、村の窮乏による年貢未進や訴訟発生の際は、責任を取らされて罰せられることも。

「そもそもこの延宝年間、しばしば飢饉に襲われて凶作型の不景気が続き、村請制下にある庄屋の役割は重く、未進の場合は代納も要請されたし、彦三郎（加助）にとっても庄屋の立場から借金の代替えやら、自身もまた礼服の羽織を質入れするなど借財に窮していたようである。」（『実像』87頁）

（2）藩との対立

貞享元年(1684)

9月8日 中萱村の蔵を建てる場所について、藩から組手代・甕忠左衛門に指示あり。庄屋・武兵衛宅に近い孫三郎の畑に建てるようにとのこと。

←これ以前に、加助の蔵屋敷跡に建てることを断られた模様。

加助の蔵跡には杭を4本立て、これから7年の間、「たでの木」1本も作らないようにする旨、証文を書かせよとの指示もあった。

9月9日 加助、甕忠左衛門宅に来て、すぐに証文を出すことはできません、と申し上げる。

→忠左衛門、直接代官に話すよう指示。

→感情的な対立が生まれてきたのではなかろうか。

貞享3年(1686)

9月 中萱村の初納めの際に、加助が納手代に対して村の窮状を訴える。

→納手代に打ち据えられて、村人と喧嘩になる。

→翌月、藩の役所に訴え、騒動となる。

3、加助と貞享騒動

貞享騒動を主導したとされる多田加助ですが、具体的なかわり方がはっきりとしないところもあります。

（1）謀議したのは加助宅？熊野神社？

事前の打ち合わせがなくては、訴訟の日程の調整も、5ヶ条の訴状を揃えることもできないが、その謀議が行われた場所がはっきりしない。

・加助宅——『眞篤^{みすずかる}茹信濃美談』など

・権現の森（熊野神社）——田中薫『貞享義民一揆の実像』、『南安曇郡誌』など

（『信府統記』や「郷中訴訟之事控」などの同時代の史料には書かれていない。）

（2）加助ら訴訟人と城下に押し寄せた百姓衆とのかかわり

・「強訴^{ごうそ}」か？…「郷中訴訟之事控」（同時代の記録）【史料2（前回配布）】

村々に車廻状が回されて、「男役で松本へ出るように、出ない家には火を付ける」と周知された。
ただし、町方の役人が書いたもの。…情報源がはっきりしない。
——加助たちが煽動した可能性も（私見ですが）。

・「越訴^{おっそ}」か？…『真篤^{みすずかる}菰信濃美談』(明治時代の物語)

加助が小穴善兵衛ら信頼できる仲間 11 名を集めて訴訟について自宅で密談。

自分たちだけで行動するつもりだったが、どこからか情報が漏れて百姓たちが馳せ集まってきた。

七、語り継がれる「義民」——供養と顕彰

1、回向（供養）する遺族

(1) いちょう堂——小穴善兵衛の妻が住んだ庵

小穴善兵衛の死後、男の子を出産したが、生まれて 20 日でおできがもとで世を去った。

善兵衛の妻・お里は善兵衛の墓のそばに庵を建て、尼となって亡き夫たちを供養する余生を送った、という。庵の傍らに銀杏の木が立っていることから「いちょう堂」と呼ばれる。

(2) 砂原の墓地の首塚——加助父子のものと思われる首塚

加助親子 4 人が処刑され、いよいよ埋められようとするとき、加助の母方の島田某と、親戚の野本某が刑場へ行き、下役人に心づけをして 4 人の首を持ち帰った。首は島田家の墓のある西中萱の砂原の墓地に埋められ、目印に柏樹の木を植えておいたと伝えられる。木は枯れたため、大正 5 年(1916)に伐られてしまったが、平成 5 年(1993)に柏樹の木が立てられ、首塚として整備された。

(3) 松本市笹賀今村の一条家墓地——堀米弥三郎の首塚

堀米弥三郎は、塩尻組今村（現 松本市笹賀今村）の一条家の出身。島立組堀米村の堀米家へ養子となっていた。騒動の首謀者らが捕縛される前日、弥三郎は事態を察知してか、実家の一条家へ逃れ、さらに諏訪領の南熊井へと逃れていた。

しかし松本藩の役人が、実家に圧力をかけてきたため、弥三郎も逃げきれず、小俣で代官に引き渡されたのち、首を討たれた。

処刑後、弥三郎の甥の源五郎が刑場から首を持ち帰り、一条家の墓地の桜の木の下に埋めたという。

(4) 堀米弥三郎の墓「一百ヶ年忌造之」——先祖を忘れなかった子孫たち

2、供養する地域の人々

(1) 50 回忌の追悼——長尾組・上野組の人々が供養

・享保 20 年(1735) 大乘^{だいじょう}妙典^{みょうてん}（法華^{ほけ}経^{きょう}）二千部^{どくじゅう}読誦

・寛保 元年(1741) 読誦を記念した供養塔を楡村に建立（長尾組・上野組）

・この供養塔の存在は伝わっていたが、どれかは不明だった。→平成 12 年に発見される。

(2) 150 回忌の追善菩提そして語り継ぎへ

・天保 6 年(1835) 刑死した 13 人の追善供養が行われている。

（『三郷村誌Ⅱ 第二巻歴史編上』（2006 年）296 頁）

・「多田加助騒動記」などが書かれるようになったのもこのころか。

3、民権の象徴としての「義民」——明治時代

(1) 竹内泰信^{たけうちやすのぶ}（南安曇郡高家村出身）「中萱加助略伝」と『真篤^{みすずかる}菰信濃^{しのの}美談^{びだん}』

明治 11 年(1878)4 月 『松本新聞』紙上に「中萱加助略伝」を 30 回にわたり連載。

明治 16 年(1883)1 月 「略伝」を単行本『真篤菰信濃美談』にまとめる。

戯作者・^{かながきるぶん}仮名垣魯文は序言を記し、「今夫代議の政論を唱へ、民権の主義を講ずるは字義名称こそ新なれ、其意東西古今の別なし」と述べ、多田加助も民権家のひとりとして位置づける。【史料 12】

(2) 松澤求策『^{みんけんかがみ かい すけのおもかげ}民権鑑 嘉助面影』…求策が伝えたかったこと

明治 11 年(1878)秋 鶴舟野史(松澤求策)著

明治 12 年(1879)2 月 松本南深志町・常盤座で公演——以後、塩尻や穂高などでも公演

- ・史実との整合が取れているとはいえないが…
- ・「(放光寺産の大根に焦点が当たった場面の引用から) ここで観客は自分たちの住む親しい地域の名前にふれた内容と農民としての共感からどっと笑うであろう。農民の立上りに期待する求策は農村歌舞伎の内容が武士中心なのに対し、全く農民の、それも住んでいる地域の土のにおいのぷんぷんする農民中心の舞台をつくりあげた。」

(中島博昭『鋤鋤の民権 松沢求策の生涯』(銀河書房・1979 年) 111 頁)

→演劇を通してわかりやすく人々に伝える——農民の立上りを国政へ

- ・登場人物の嘉助に辞世の句を詠ませる。「まで暫し かへらぬ旅へ行とても ^{かが}屈まぬ民の 心残さん」

(3) 武居用拙 加助は「民権の宗」【史料 13】

(4) 貞享義民社の造営

明治 13 年(1880) 加助を祀っていた祠を旧郷蔵跡に移し規模を拡張して義民 12 柱を合祀。

←それまで加助の祠は多田家の邸内に置かれていた

明治 31 年(1898) 社殿を造営。

水野子爵家で祀られていた多田加助像や祭祀料が寄進され、水野忠直公も合祀される。

4、「義民」の顕彰——階級闘争の歴史研究から人権啓発へ——戦後～現在

(1) 勢高の刑場の確定

昭和 25 年(1950)10 月 16 日 丸ノ内中学校の工事現場で 18 体の人骨が発見された。

→このうち埋葬の仕方の違う 1 体を除く 17 体が勢高の刑場で処刑された義民たちのものと考えられた。→これらの骨が拾い上げられ、「義民塚」が建設された。

(2) 百姓一揆の発掘研究

——民主化闘争、労働者・農民の階級的立場に立つ運動の歴史を明らかにする研究がさかんになる。

百姓一揆年表に収録された件数(戦前戦後の比較)

- ・昭和 12 年(1937) 1,240 件
- ・昭和 34 年(1959) 1,635 件
- ・昭和 41 年(1966) 2,809 件 ——戦後になって大きく増加

(横山篤美『^い靱の乱 百姓一揆「加助騒動」の真相』(家の光協会・1987 年) 146 頁)

(3) 貞享義民社の整備

昭和 32 年(1957) 社殿を現在地に移転し、石鳥居を建立。←それまで社殿は加助の墓の前にあった。

昭和 61 年(1986) 貞享義民 300 年祭を斎行。「貞享義民顕彰慰霊碑」を建立。

(4) 貞享義民記念館の設置

平成 4 年(1992)11 月 22 日 開館。

- ・厳しい幕藩体制の下で過酷な年貢に苦しむ農民を救おうと、身を挺して「人間の生きる権利」を主張した多田加助はじめ貞享義民の業績を顕彰する。
- ・館のテーマ「生きる権利の主張」——人権啓発も館の使命

——記念館の入口には、日本国憲法第 11 及び 12 条と、世界人権宣言のプレートが掲げられる。

5、素朴な伝承

- (1) 熊野神社の逆さ杉【参考資料 1】
- (2) 加助の墓の御利益【参考資料 2】
- (3) 百姓に同情した武士・鈴木伊織

鈴木伊織…捕縛された加助たちの助命に奔走し、水野忠直から赦免状をもらって江戸から駆け付ける。

→勢高の刑場の手前の駒町で馬の脚が折れ、刑の執行に間に合わず。

——馬の頭蓋骨を祀ったという駒町の馬頭観音。

6、崇る!?「義民」——これも素朴な伝承

- (1) 鋤鍬を入れると崇る!?——柏樹の首塚【参考資料 3】
- (2) 松本城天守閣が傾いた原因は？

「年貢は五斗入れ二斗五升摺りだぞ」と絶叫し、すさまじい形相で松本城を睨んだ

『信州の口碑と伝説』（昭和 8 年所収）

- (3) 松本大變の原因は、加助の祟り？

享保 9 年(1725)7 月 28 日 松本大變（8 代将軍・徳川吉宗のころ）

松本城主・水野隼人正忠恒^{はやとのしょうただつね}、江戸城内で長府藩の世子・毛利主水正師就^{もんどのしょうもろなり}に斬りつける。

忠恒は婚儀が整い、祝宴を行っていたさなかの登城だった。——酒乱による刃傷

→水野家は改易——ただし、分家の水野老岐守忠定（当時、若年寄となっていた）の計らいで忠直の子・惣兵衛忠毅^{そうべゑただよし}に佐久郡内の 7 千石、宮内忠照^{くゐただてる}に 2 千石が与えられた。

——忠恒の狂乱は、加助の怨霊によるものともいわれた。

- (4) 加助夫婦惜別の岩（加助の縁切石）

捕らえられた加助が、後を慕って追いつがってきた妻を、因果を含めて離縁し、この石に腰をおろしてしばし名残を惜しんだ。

嫁入りのとき、この石の前を通ると、縁が切れるというので、土地の人はまわり道をする習慣になっている。『信州の口碑と伝説』（昭和 8 年所収）

八、おわりに—今後の課題—

1、「義民」像はどうなる？どうする？

- (1) 貞享騒動に対する見方——時代の思潮を投影していた。

- ・明治——幕藩体制（封建制度）の否定とともに、「自由民権」→「近代的」「開明的」な考え方。
- ・戦後——階級闘争論→支配階級に抵抗した義民。
- ・平成——「基本的人権」→過去にはこんな偉人がいて身を挺して人々を守った。

- (2) 中萱村の多田加助の本当の心情を「忖度」できないものか？

- ・江戸時代に生を享けて、地域の為に努力し、藩に対して訴訟を行い、処罰された村の有力者——彼は「義民」という言葉を知らない。「民権」「人権」という概念は持っていない。

- ・持っていたのは…

→儒教道徳などの当時の倫理観

→そして、彼の先祖や地域の先人たちが創り上げてきた村や地域の歴史の記憶

これらを踏まえなければ中萱村の加助の「実像」は見えてこない。

中世から受け継いできた財産と村の有力者であるという意識——自らの共同体を守る

・当時の長尾組、中萱村などの共同体が置かれていた環境

生産環境——堰、入会地など

他の村や藩との関係

→これらのことをより深く研究していく必要があるのでは。

<参考文献>

「郷中訴訟之事控」(『新編信濃史料叢書 第19巻』所収)

『信州塩尻赤羽家 元禄大庄屋日記』(1974年)

田中薫『松本領 貞享義民一揆の実像』(信毎書籍出版センター・2005年)

『三郷村誌Ⅱ 第2巻歴史編上』(2006年)

上嶋周一『貞享三年 義民加助騒動記』(1975年)

横山篤美『朶の乱 百姓一揆「加助騒動」の真相』(家の光協会・1987年)

横山十四男『信濃の百姓一揆と義民伝承』(郷土出版社・1986年)

<Memo>